

## LOVE in Letter 7

### ～輸血を受けた患者さんのメッセージ～

「まさか自分がお世話になるとは！！」

私は高校1年生から献血を始めて、輸血を受ける39歳まで、年に2～3回位ずつ献血をしていました。それは、健康な体に感謝しつつ、自分にできるちっぽけな社会貢献でした。

そして転機も献血でした。いつもどおり献血に行った私に告げられたのは血色素比重が低く献血ができないこと、そしてなるべく早く病院に行くことでした。

病院で告げられた病名は、「急性骨髄性白血病」。そこから長い入院闘病生活が始まりました。

抗がん剤による治療では、自分の力では一時的に血液を作ることができなくなり、血液検査では各数値が非常に低くなります。赤血球が低くなり体はだるく、顔色は青白くなります。血小板が低くなれば出血しても止まらなくなります。

その時に輸血が行われます。赤血球をいただいた時の体が楽になる経験、血小板をいただいた時の出血に対する安心感。例えることができない感謝です。

その後、私は「骨髄移植」を受けて、現在は社会復帰をしています。

血液も骨髄も人工的には作れません。輸血をしてくれた方、骨髄を提供してくれた方の善意によって、今、私は生きることができるのです。感謝感謝です。

血液輸送車がサイレンを鳴らして走りぬけて行きました。多くの皆様の善意を運んで行きました。

私はもう献血をすることができませんが、献血という大きな和が今後も続く事を願っています。